

## 友人関係の進展過程におけるパーソナリティの類似性認知 および一致・不一致事象の変化について<sup>1)</sup>

吉 原 智恵子

### 要 旨

友人関係の進展過程におけるパーソナリティの類似性と、友人関係間で一致する事象および不一致な事象に関する認知的变化について、英国内の大学寮において半年の間隔をあけて2回の質問紙調査を行った。分析対象者は2回の調査どちらにも回答を行った新入生22名であった。パーソナリティの類似性は、パーソナリティを測定する両極尺度への回答をもとに、回答者と回答者によって選択された親しい友人との間の測定距離により評価した。その結果、親しい友人との距離は半年間で変化は見られなかったが、1回目の質問紙調査時においてランダムに割り当てた他者との距離よりも大きいことが示された。また自分自身の能力は親しい友人よりも高く認知されていることが明らかになった。また2回の調査に共通して、友人関係間で一致している事象は不一致な事象よりもその数は多いが、不一致な事象の相対的な比率は2回目においてより増加し、さらにその内容も広がり示した。また人生観についての不一致事象は2回の調査を通して一貫して多く報告された。これらの結果について、認知的斉合性の理論および類似－非類似非対称仮説より議論された。

**Key words:** personality similarity, agreement/disagreement issues, friendship development, longitudinal study

### Abstract

Similarity of personalities and perceived agreement, and disagreement between close friends regarding various issues were investigated by using a longitudinal method. The study was conducted in a university residence hall in the UK in two waves with an interval

---

1) 本稿は日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会(1998)において報告した研究データから新たに分析用データを再抽出し、再分析および再構成を行ったものである。

of six months. Participants were 22 first-year students that responded to two investigations. Personality similarities were evaluated as the distance between the self and a close friend, which was assessed by responses to a bipolar scale. Results indicated that the distance between the self and a close friend did not change during the six months, but the distance was greater than that between randomly selected pairs in the first wave. It was also indicated that one's ability was recognized to be higher than that of the close friend. Although the number of issues of agreement was more than that of disagreement at both waves, the ratio of issues of disagreement was higher, and contents of disagreement spread wider at the second wave. In the developing friendship, disagreements regarding the way of life were reported more often than other categories at both waves. These results are discussed from the perspective of cognitive consistency theory and the similarity-dissimilarity asymmetry hypotheses.

## 問題と目的

近年の日本の若者たちの友人関係について実証的な調査を行った岡田（1995）は、次の特徴をもつ3群を抽出した。自分自身の内面への関心が低く、表面的で楽しい関係を求める「群れ関係群」、相手を傷つけないように気を遣う「気遣い関係群」、内面的な関係を避ける「関係回避群」である。内面的なふれあいを避け、他者も自分自身も傷つかないように表面的なつきあい方をする若者の特徴は1990年前後から指摘されるようになり、それまでの青年期の友人関係の様相とは異なることが指摘されてきた。

一方、他者との関係性が深まっていく過程は、時代や文化の影響を受けながらもひろく共通する特徴が見られることが仮定されてきた。このような対人関係の形成・進展過程は、互いの印象形成から始まり、自己開示を介して次第に相互依存性を増加させていく過程としてとらえられている。たとえば社会的浸透理論（Altman & Taylor, 1973）は、パーソナリティ構造を同心円の階層的な構造をもつものと仮定し、対人関係の発達、このパーソナリティ構造の表層部から中心部へと親密な相互作用が深まる側面と、情報交換を行う領域の広さが増す側面の二側面があるとしている。また下斗米（2000, 2002）は、このような対人関係の一連の過程を「親密化過程」と呼び、「自己開示の交換を通して徐々に明らかにし合った両者の類似・異質性に基づいて、特定の役割行動を遂行するように期待し合い、当事者間の相互依存性レベルを高め影響力を増していく過程」（下斗米, 2000, p.2）と定義している。すなわち対人関係が親密化していく諸段階を経るごとに二者間が抱える課題は変化していき、それまでに構築した役割行動の分担を見直さなければならない時期を迎える。その際には両者の類似・異質性認知に基づいて役割分担を再構成するという過程を繰り返しながら、全体を通して漸次的に相互依存性のレベルが高められていく進展過程としてとらえている。例えば夫婦関係では、一緒に生活することから発生する家事や、

子どもの誕生とともに発生する育児など、新しく直面する課題のそれぞれに対して互いの役割行動の分担が求められるようになるが、このように関係を維持するに際して新たに生じる課題が変化することにより類似・異質性認知を手がかりに役割行動の再構築を繰り返し、夫婦の相互依存的な関係性が深まることを仮定している（下斗米，2002）。では、大学生の友人関係の進展に沿ってどのような類似性・異質性が認知されるのだろうか。

### 関係初期の態度の類似性・異質性の役割

関係初期の印象形成期において態度の類似性が対人魅力に果たす役割の重要性を指摘したのは Byrne & Nelson（1965）による類似性魅力仮説（similarity-attraction hypothesis）である。彼らは態度の類似性と対人魅力は直線的な比例関係にあると仮定し、態度が類似するほど当該他者に対する魅力が増加すると考え、実験的にこの仮説を実証した。しかしこれに対して Rosenbaum（1968）は、Byrne らの実験では統制群の設定が欠けているという不備を指摘し、新たに統制群を配した追試を行うことによって、類似性が対人魅力に及ぼす効果は類似性の情報を提示されなかった統制群と有意な差はなく、むしろ非類似であることの認知が刺激人物への対人魅力を低下させる影響が大きいと主張した。そしてこれを非類似性反発仮説（dissimilarity-repulsion hypothesis）として提唱した。この2つの仮説に対する検証実験が行われる中、第三の仮説として Singh & Ho（2000）は類似－非類似非対称仮説（similarity-dissimilarity asymmetry hypotheses）を提唱し、類似性と非類似性の対人魅力に及ぼす効果の重みは非対称であり、非類似性のほうがより重みづけが大きいことを実験的に示した。そして（初対面の関係性においては）態度が類似していること、類似していないことのどちらもが関係性の継続の源泉としての対人魅力に影響を与えるが、その重みは後者の方が大きいと主張している。友人関係が進展していく過程で、この現象は変化していくのだろうか。

### 関係性の継続に伴う類似性・異質性認知の変化

下斗米（1990）は大学生の友人関係における親密さを、親密感評定値をもとに「初期段階」、「中期段階」、「後期段階」の3段階として設定し、JSDQ（Jourard's Self-Disclosure Questionnaire）の36項目を用いて類似・異質性認知の測定を両極9件法の尺度により行った。その結果、親密さが深まるのに伴って自己開示が頻繁に交換されるようになり、段階が進展すると、互いの類似性を認知するばかりではなく、役割行動期待の基礎となる異質性を認知する傾向も強まることを指摘した。調査の結果からは、「態度・意見」、「友人関係」、「身体・容姿」は自己開示と類似・異質性認知の両面において関係の進展に伴う変化が大きく、また「学業」、「趣味・嗜好」については類似・異質性認知の変化が大きいことが示された。

また門田・平本（2004）は、大学生が理想とする友人との間に望む類似－非類似性および現実の友人との間で認知される類似－非類似性を調査した。その結果、「興味の対象」と「考え方や価値観」といった基本的志向性は、理想と現実の両面において類似していると認知されることが

友人関係を維持するために重要であると指摘した。

但し以上の研究は横断研究によるものであり、縦断研究による詳細な検討が求められる。

### 友人関係とパーソナリティの類似性

Duck & Craig (1978) は大学寮において3回 (T1: 入学1か月後, T2: 3か月後, T3: 8か月後) の縦断調査を新入生40名に対して実施し, CPI (California Psychological Inventory), AVSV (Allport-Vernon Study of Values), Reptest (Role Construct Repertory Grid Test) の3つのパーソナリティ尺度を用いて友人関係の進展過程における類似性の変化を調査した。パーソナリティの類似性を友好関係にあるペアと友人として選択されていないペア (すべての組み合わせ) で比較したところ, T1では両者に有意差は見られず, またT2ではAVSVの下位尺度と交友関係との交互作用のみが示された。さらにT3ではReptestにおいてのみ交友関係間に有意差が見られた。ここで示された有意差は, 友人関係にあるペアのほうがそうでないペアよりも有意に類似性が高いことを示していた。

またKandel (1978) はニューヨークにある公立高校5校において1879名を対象とした大規模な調査を行い, 友人関係にある二者間の類似性と対人魅力との関係を調査した。その結果, 友人関係において類似性が高い属性は, 学年, 性別, 人種, 年齢といった人口統計学的な項目やドラッグの摂取に関連する行動についての項目であることが示されたのに対して, 心理学的な属性 (規範を順守しないことや社会的孤立性など) についての類似性はいくつも低く, パーソナリティに関わる類似性は行動の類似性よりも重要さが低いことが明らかになった。一方, 交友関係にある二者間の類似性は, そうでないペア間の類似性よりも全般的に高いという結果が得られている。

以上からは, パーソナリティの類似性は関係初期においてはあまり重要でないことが予測される。また関係が継続される場合に増加するパーソナリティの類似性認知も限定的であると解釈できるであろう。以下に述べるように, また先に述べた下斗米 (2002) にも指摘されるように, むしろ関係性の継続に伴い, 異質性や異なる視点を認知することの効用があるのではないだろうか。

### 二者間の不一致による認知的葛藤の効用

青年期における親密な友人との関係性は, 自己概念やアイデンティティの形成に重要な役割を果たしていると考えられている。例えばDindia (1997) はアイデンティティの形成と友人関係の進展過程はともに自己開示によって媒介されることを指摘し, 友人同士の関係性の中で互いに自己開示しあうことが, 友人関係の進展とアイデンティティの形成の双方に重要な波及効果をもつと述べている。さらに杉村 (1998) は, 友人関係の中で互いの視点の違いに気づき, そのことにより発生する認知的葛藤を調節することがアイデンティティの形成に貢献すると指摘している。

青年期の友人関係の進展を縦断的に調べた研究では, 関係性の深まりとともに葛藤や感情的な苛立ちが生じることが示されてきた (Eidelson, 1980; Hays, 1985)。Hays (1985) の研究では,

関係性の初期にはほとんどこのような葛藤や感情的な苛立ちは報告されないのに対して、知り合って9か月後には急激に増加していることが示された。そして関係性の進展の中で、このような葛藤や不満をどのように処理するのかを明らかにすることの重要性が指摘された。しかし、例えば下斗米（2002）の縦断研究では交友関係の開始から1ヵ月後に葛藤を経験する割合はその後の期間よりも高く、葛藤が表面化する時期は早いことが示されており、一致した結果は得られていない。

## 目 的

以上の研究を踏まえ、本研究では大学寮において縦断調査を行い、友人関係の進展過程に伴うパーソナリティおよび態度等の類似・異質性認知の内容と変化の様相を明らかにする。態度の類似性については、自他間で「一致していること」、「不一致なこと」について自由記述で問うことにより、二者間で共鳴する内容および葛藤する内容を具体的に調べることにする。「一致していること」、「不一致なこと」としてデータを収集する理由は、類似しているか否かという観点以上に、より明確に両者の間に存在する「食い違い」あるいは「ずれ」をピックアップするためである。

## 方 法

### 調査参加者および調査実施時期

ブリストル大学（英国）の1つの学生寮において6か月の間隔を置いて2回にわたる質問紙調査を行った。1回目の調査（T1とする。）は1996年11月～12月にかけて実施した。質問紙は341名の学生に配布され、60名（男性28名、女性32名）から回答を得た。回答者のほとんどは新入生で、年齢の幅は18歳から23歳、最頻値は調査年12月末日時点で19歳であった。出身地は、英国内49名（81.7%）、アジア5名（8.3%）、その他ヨーロッパ4名（6.7%）、オセアニア2名（3.3%）であった。

2回目の調査（T2とする。）はT1からおよそ半年後の1997年5月に、1回目の調査を実施した学生のうち学生寮にそのまま居住している学生339名を対象とした。回収は5月～6月にかけて行った。70名（男性34名、女性35名、性別不明1名）からの回答が回収され、うち36名はT1でも回答を提出していた。回答者の年齢の幅は18歳から24歳であり、最頻値は20歳（1997年12月末日時点）であった。出身地は、英国内59名（84.3%）、アジア4名（5.7%）、その他ヨーロッパ5名（7.1%）、オセアニア1名（1.4%）、不明1名（1.4%）であった。分析対象者については後述する。

### 質問紙の構成と手続き

1回目の質問紙は、1996年度秋学期終了間近に一学生寮に居住するすべての学生に配布した。

これとあわせて、すべての学生にIDナンバーを付した一覧表も配布し、回答はIDナンバーで行った。回答用紙は特設した回収ボックスから回収した。また、この調査は社会的関係性の発達について調査することを目的としたものであること、質問紙は寮内のすべての学生に配布されていること、さらに翌年には2回目の質問紙調査が実施される予定であることを紙面を以て伝えた。

その後約6ヵ月の間隔をあけて春学期の終了間近に、2回目の質問紙を配布した。配布、回収の方法は1回目の調査と同様に行った。

質問紙では、まず親しい友人との間で共有する自己－他者認知の共通次元を測定するため、Deutsch, et al. (1991) および Deutsch & Mackecy (1985) が用いた自発的特性生成法 (spontaneous trait generation method) による測定を行った。回答者は自分自身を言い表す言葉やフレーズを9つまであげるように求められた。ただし、本稿ではこの結果の報告は割愛する。

次に寮内で親しくしている友人一人をIDナンバーにより回答を求め、寮内に親しい友人がいない場合には寮外の親しい友人の氏名を記入してもらった。次に、ここで回答した友人への好意度を3件法で回答してもらい、その友人のパーソナリティを表す言葉あるいはフレーズを9つまであげるように求めた。これは最初に回答した自発的特性生成法の自己への回答と対をなすものである。

次に、上記の友人との間で一致している事柄および不一致な事柄について、自由記述によりそれぞれ6つまでリストアップするように求めた。さらに回答者が認知している友人との類似性を測定するため LaPrelle, et al. (1991) が用いた尺度から28項目 (Table 1) を選択し、自己と友

Table 1 パーソナリティ評価に使用した両極尺度項目

1	Rebellious	—	Conforming
2	Successful	—	Unsuccessful
3	Talkative	—	Silent
4	Tolerant	—	Intolerant
5	Agreeable	—	Disagreeable
6	Neat/Tidy	—	Careless
7	Bold	—	Shy
8	Patient	—	Impatient
9	Calm	—	Anxious
10	Sophisticated	—	Unsophisticated
11	Religious	—	Atheist
12	Good Natured	—	Irritable
13	Sociable	—	Reclusive
14	Progressive	—	Traditional
15	Efficient	—	Inefficient
16	Reliable	—	Undependable
17	Warm	—	Cold
18	Intelligent	—	Unintelligent
19	Relaxed	—	Tense
20	Attractive	—	Unattractive
21	Mild/Gentle	—	Headstrong
22	Skeptical	—	Naive
23	Productive	—	Unproductive
24	Adventurous	—	Cautious
25	Loud	—	Quiet
26	Persevering	—	Quitting
27	Composed	—	Excitable
28	Cooperative	—	Negativistic



人それぞれへのパーソナリティ評価を9件法により行った。そして最後に、回答者のIDナンバー、性別、生年、国籍、民族集団、英国人の場合には出身地、学科名、宗教といった個人的な情報に関する回答を求めた。また、回答者が属する学科での学習の興味関心の度合い、大学へ入学した動機、休暇期間中に行いたい活動についてもたずねたが、本稿ではこの結果の報告は割愛する。また、2回目の質問紙も1回目の質問紙調査と同じ構成で行った。

## 結 果

### パーソナリティの類似性認知

親しい友人として選択した他者と自己とのパーソナリティの類似性認知を測定した28項目の尺度について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。自己評価に基づく結果をTable 2, Table 3に、友人への評価に基づく結果をTable 4, Table 5に示す。

1回目の質問紙調査によって得られた自己評価データ ( $n=60$ ) では、固有値の減衰状況および解釈可能性から3因子を抽出した (Table 2)。第1因子は "efficient", "productive", "persevering" など能力に関わる内容であることから「有能性」と命名した。第2因子は "patient", "tolerant", "agreeable" など温厚で寛容な様子を表す内容であることから「寛容性」

Table 2 自己評価に基づく因子分析結果 (T1) ( $n=60$ )

		F1 有能性	F2 寛容性	F3 社交性
# 15	Efficient	.77	-.07	.04
# 23	Productive	.71	.06	.06
# 26	Persevering	.69	.06	.08
# 18	Intelligent	.68	-.23	-.18
# 10	Sophisticated	.68	-.19	-.20
# 2	Successful	.65	.08	.09
# 16	Reliable	.56	.02	.39
20	Attractive	.45	-.02	.08
6	Neat/Tidy	.44	.09	.06
22	Skeptical	.34	-.11	-.08
11	Religious	.27	-.14	.10
# 8	Patient	-.08	.82	-.11
# 4	Tolerant	-.13	.80	-.10
# 5	Agreeable	-.08	.65	.23
# 9	Calm	.23	.57	-.27
# 12	Good Natured	-.12	.56	.38
28	Cooperative	.11	.55	.39
21	Mild/Gentle	-.18	.53	-.23
19	Relaxed	.40	.43	.01
17	Warm	.18	.07	.58
# 13	Sociable	.06	.05	.58
27	Composed	.38	.18	-.56
# 3	Talkative	.07	-.52	.54
# 25	Loud	-.31	-.02	.51
# 7	Bold	.14	-.06	.45
14	Progressive	-.02	-.08	.36
1	Rebellious	.01	-.30	.32
24	Adventurous	.16	.18	.30
因子間相関		F1	.361	.058
		F2		.078

# は T1, T2 で共通する因子を構成する項目を示す。

Table 3 自己評価に基づく因子分析結果 (T2) ( $n=70$ )

		F1 有能性	F2 社交性	F3 寛容性
# 23	Productive	.88	-.01	-.13
# 15	Efficient	.68	-.23	-.07
# 16	Reliable	.64	-.09	-.30
# 26	Persevering	.58	.13	.17
# 2	Successful	.54	.30	.09
# 10	Sophisticated	.50	.12	.08
# 18	Intelligent	.46	.16	-.03
28	Cooperative	.42	.15	.17
6	Neat/Tidy	.33	-.17	.01
17	Warm	.29	.15	-.09
22	Skeptical	.21	.17	-.13
11	Religious	.20	-.06	.06
# 25	Loud	-.08	.98	-.07
# 3	Talkative	.03	.81	.05
# 13	Sociable	-.04	.67	.24
# 7	Bold	.24	.52	.17
1	Rebellious	.09	.42	-.14
24	Adventurous	.16	.41	.00
21	Mild/Gentle	.16	-.37	.30
20	Attractive	.33	.33	.16
14	Progressive	.00	.24	-.06
# 4	Tolerant	-.38	-.02	.78
# 8	Patient	.08	-.22	.77
# 9	Calm	.17	-.23	.74
19	Relaxed	-.11	.14	.63
# 12	Good Natured	.10	.13	.61
# 5	Agreeable	-.09	.26	.56
27	Composed	.26	-.27	.48
因子間相関		F1	-.090	.371
		F2		.143

# は T1, T2 で共通する因子を構成する項目を示す。

Table 4 他者評価に基づく因子分析結果 (T1) (n=60)

		F1 活動性	F2 寛容性	F3 生産性
# 25	Loud	.80	-.17	-.13
# 3	Talkative	.71	.28	.03
# 7	Bold	.70	-.16	.10
# 13	Sociable	.64	.40	.02
# 24	Adventurous	.53	-.19	.15
# 14	Progressive	.52	-.01	.11
6	Neat/Tidy	-.50	.09	.38
27	Composed	-.42	-.07	.38
20	Attractive	.28	.09	.09
19	Relaxed	.27	-.02	.05
11	Religious	-.21	.17	.10
# 4	Tolerant	-.11	.78	-.11
# 5	Agreeable	-.02	.78	.04
# 12	Good Natured	.14	.60	.06
# 21	Mild/Gentle	-.14	.54	-.10
# 8	Patient	-.17	.54	-.02
# 28	Cooperative	.06	.47	.16
17	Warm	.30	.44	.00
1	Rebellious	.37	-.42	-.01
# 16	Reliable	.04	.40	.07
# 23	Productive	.07	.12	.73
# 26	Persevering	-.09	.00	.70
# 2	Successful	.18	.10	.68
# 22	Skeptical	.09	-.32	.67
# 18	Intelligent	.04	-.04	.57
# 15	Efficient	.02	.18	.56
# 10	Sophisticated	.10	-.03	.54
9	Calm	-.20	.03	.27
因子間相関		F1	.100	-.118
		F2		.073

# は T1, T2 で共通する因子を構成する項目を示す。

Table 5 他者評価に基づく因子分析結果 (T2) (n=70)

		F1 活動性	F2 生産性	F3 寛容性
# 3	Talkative	.82	-.01	-.06
# 7	Bold	.74	.08	-.07
# 25	Loud	.72	-.11	-.07
1	Rebellious	.62	-.04	-.09
# 13	Sociable	.62	-.02	.37
# 24	Adventurous	.55	.09	-.02
# 14	Progressive	.48	.16	.02
11	Religious	-.18	.04	.18
# 15	Efficient	.06	.80	-.06
# 23	Productive	.14	.77	-.06
# 26	Persevering	.17	.61	.13
# 10	Sophisticated	-.22	.59	-.06
# 2	Successful	.09	.59	.04
6	Neat/Tidy	-.41	.53	.06
# 22	Skeptical	.08	.46	-.36
# 18	Intelligent	.09	.43	-.13
# 16	Reliable	.01	.43	.05
9	Calm	-.25	.37	.36
27	Composed	-.20	.36	.31
20	Attractive	.14	.21	.15
# 4	Tolerant	-.06	-.33	.83
# 8	Patient	-.23	-.16	.74
# 12	Good Natured	.20	-.06	.73
# 28	Cooperative	.16	.36	.67
# 21	Mild/Gentle	-.20	.03	.61
# 5	Agreeable	.29	.06	.55
17	Warm	.30	.07	.36
19	Relaxed	-.15	.17	.26
因子間相関		F1	.204	-.010
		F2		.166

# は T1, T2 で共通する因子を構成する項目を示す。

と命名した。第3因子は"warm", "sociable", "composed" (負) など他者と活発に関わる様子を表す内容であることから「社交性」と命名した。また他者評価データについても同様に固有値の減衰状況および解釈可能性から3因子を抽出した (Table 4)。第1因子は"loud", "talkative", "bold" に加え, "adventurous" などの因子負荷量が高いことから「活動性」と命名した。第2因子は"tolerant", "agreeable", "good natured" など親切で寛容な様子を表すことから「寛容性」と命名した。第3因子は"productive", "persevering", "successful" など有能で生産性の高い様子を表すことから「生産性」と命名した。

また2回目の質問紙調査によって得られたデータについても同様に因子分析を行った。自己評価データ (n=70) では, 固有値の減衰状況および解釈可能性から3因子を抽出した (Table 3)。第1因子は"productive", "efficient", "reliable" などにより「有能性」, 第2因子は"loud", "talkative", "sociable" などにより「社交性」, 第3因子は"tolerant", "patient", "calm" などにより「寛容性」と命名した。この結果は1回目の調査データと因子構造がほぼ類似していると解釈できる。さらに他者評価データも同様に固有値の減衰状況および解釈可能性から3因子を抽出した (Table 5)。第1因子は"talkative", "bold", "loud" などにより「活動性」, 第2因子は"efficient", "productive", "persevering" などにより「生産性」, 第3因子は"tolerant", "patient", "good natured" などにより「寛容性」と命名した。この結果もまた1回目の調査デー



Table 6 自己評価データによる因子分析から抽出した項目群

F1	有能性		
15	Efficient	—	Inefficient
23	Productive	—	Unproductive
26	Persevering	—	Quitting
18	Intelligent	—	Unintelligent
10	Sophisticated	—	Unsophisticated
2	Successful	—	Unsuccessful
16	Reliable	—	Undependable
F2	寛容性		
8	Patient	—	Impatient
4	Tolerant	—	Intolerant
5	Agreeable	—	Disagreeable
9	Calm	—	Anxious
12	Good Natured	—	Irritable
19	Relaxed	—	Tense
F3	社交性		
13	Sociable	—	Reclusive
3	Talkative	—	Silent
25	Loud	—	Quiet
7	Bold	—	Shy

Table 7 他者評価データによる因子分析から抽出した項目群

F1	活動性		
25	Loud	—	Quiet
3	Talkative	—	Silent
7	Bold	—	Shy
13	Sociable	—	Reclusive
24	Adventurous	—	Cautious
14	Progressive	—	Traditional
F2	寛容性		
4	Tolerant	—	Intolerant
5	Agreeable	—	Disagreeable
12	Good Natured	—	Irritable
21	Mild/Gentle	—	Headstrong
8	Patient	—	Impatient
28	Cooperative	—	Negativistic
F3	生産性		
23	Productive	—	Unproductive
26	Persevering	—	Quitting
2	Successful	—	Unsuccessful
22	Skeptical	—	Naive
18	Intelligent	—	Unintelligent
15	Efficient	—	Inefficient
10	Sophisticated	—	Unsophisticated

タと因子構造が類似していると解釈できよう。

以上の結果から、2回の調査で共通する因子を構成する共通項目を抽出したところ（因子負荷量0.4以上）、Table 6、Table 7のようになった。

以下の分析は友人関係の進展過程を調べるため、2回の調査において同じ友人を選択した24名のうち、T1の時点で知り合って2か月半ほどの新入生22名を対象とした。選択した親しい友人に対する好意度は、2回の調査において有意差は見られなかった（ $t(21)=1.37$ ,  $ns$ , 1回目： $M=2.73$ ,  $SD=0.46$ ；2回目： $M=2.86$ ,  $SD=0.35$ ）。

自己と友人との類似性認知の指標としては、石黒（2011）を参考にユークリッド距離を採用し、28項目全体およびTable 6、Table 7に示した因子ごとの類似性を示す距離それぞれを算出した。この二者間の距離（PD）は以下の式により求め、これをパーソナリティ距離と呼ぶことにする。

$$PD = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (S_i - O_i)^2}$$

$n$  は項目数、 $S_i$  は  $i$  番目の項目における自己評価、

$O_i$  は  $i$  番目の項目における友人に対する評価をあらわす。

関係初期と半年経過後に認知されている友人とのパーソナリティ距離を比較するため  $t$  検定を行ったところ、28項目全体での結果および因子ごとの結果（自己評価・他者評価による各3因子）すべてにおいて有意差は見られなかった（Table 8）。

次に親しい友人に対して認知されるパーソナリティ距離と、選択していないランダムな他者とのパーソナリティ距離を比較するため、分析対象者22名に対してランダムペア<sup>2)</sup>を作成し、両

Table 8 自己と友人とのパーソナリティ距離

	項目全体		自己評価因子						他者評価因子					
			有能性		寛容性		社交性		活動性		寛容性		生産性	
T1	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
	2.21	0.71	1.83	0.81	2.20	0.98	1.97	0.95	2.15	0.81	2.00	1.00	1.97	0.75
T2	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
	2.09	0.70	1.78	0.76	2.32	1.19	1.87	1.00	2.07	1.01	2.27	1.11	1.91	0.69

者の距離を比較した。28項目全体についてはT1において有意差が見られ( $t(19) = 2.37$ ,  $p < .05$ )、友人のほうが有意にパーソナリティ距離が大きいことが示された。半年を経過した2回目の調査では有意差は見られなかった(Figure 1)。また因子ごとの結果では、T1の他者評価に基づく「生産性」因子、およびT2の自己評価に基づく「有能性」因子、さらに他者評価に基づく「生産性」因子において有意差が見られた(順に  $t(21) = 2.62$ ,  $p < .05$ ;  $t(19) = 2.27$ ,  $p < .05$ ;  $t(19) = 3.02$ ,  $p < .01$ ; Figure 2 ~ Figure 5)。これらはすべて友人のほうが有意にパーソナリティ距離が大きいという結果になった。

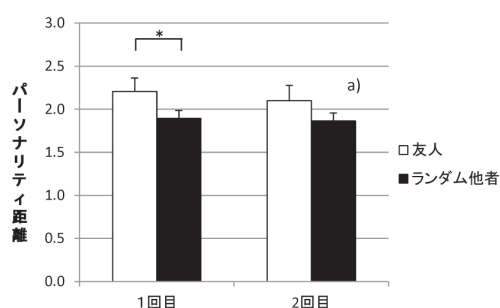


Figure 1 自他のパーソナリティ距離 (28項目平均)

a) エラーバーは標準誤差  
\* $p < .05$

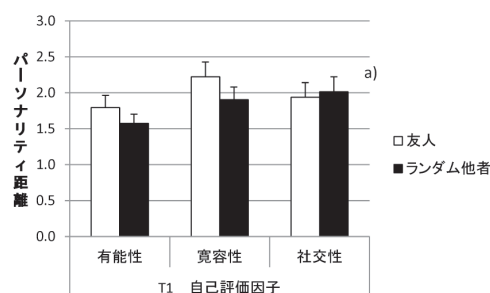


Figure 2 自他のパーソナリティ距離 (T1・自己評価因子)

a) エラーバーは標準誤差

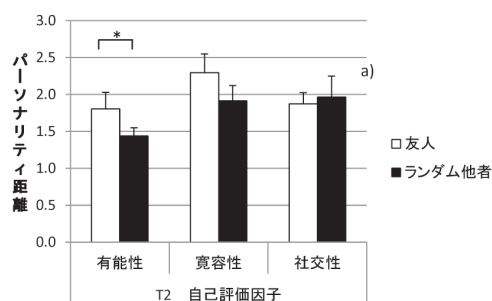


Figure 3 自他のパーソナリティ距離 (T2・自己評価因子)

a) エラーバーは標準誤差  
\* $p < .05$

2) ランダムに割り当てたペアは親しい友人として相互に選択されていないことを確認した。

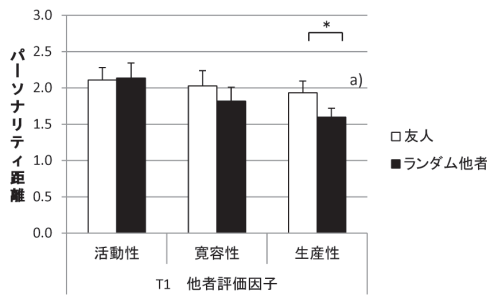


Figure 4 自他のパーソナリティ距離 (T1・他者評価因子)

a) エラーバーは標準誤差  
\* $p < .05$

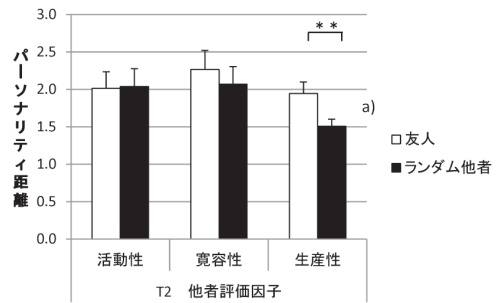


Figure 5 自他のパーソナリティ距離 (T2・他者評価因子)

a) エラーバーは標準誤差  
\*\* $p < .01$

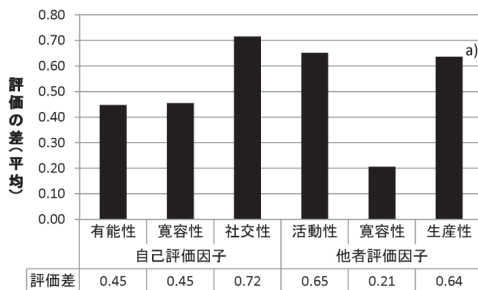


Figure 6 自己評価と友人評価の差 (T1)

a) プラスの値は自己への評価がより高いことを示す。

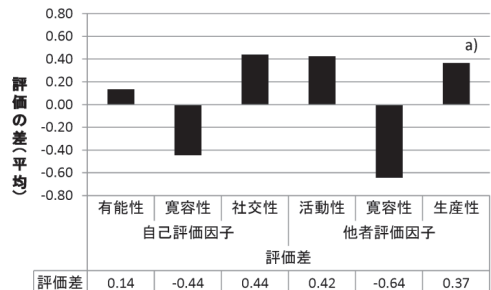


Figure 7 自己評価と友人評価の差 (T2)

a) プラスの値は自己への評価がより高いことを示す。

またパーソナリティの各項目において自己への評価と友人への評価のどちらのほうが高く評価されているかを調べるため、自己評価から友人への評価を引いた値をグラフ化したものが Figure 6, Figure 7 である。1 回目の調査時には友人との差がすべて正の評価になっていることから自己への評価がより高いのに対して、2 回目の調査では寛容性の評価因子において負の値になり、自己のほうが評価が低くなるという変化が示された。

### パーソナリティの対比的認知

次に友人に対するパーソナリティ距離が大きくなったことを受け、別の類似性の指標として評価次元の共通性に関する得点化を行った。自他を対比的にとらえ、評価次元は共通でありながら対比的に自他を布置する場合に高得点になるように換算した。自他評価の差 (絶対値) が 4 点以下の場合には 0 点、5 点から 8 点までは順次 1～4 点として換算し、スコアが高いほど対比的に他者をとらえていることを示す。28 項目の平均について、1, 2 回目のスコアを比較したところ、有意差は見られなかった ( $t(20) = 0.22, ns$ ; 1 回目:  $M = 2.57, SD = 2.86$ ; 2 回目:  $M = 2.43, SD = 3.22$ )。

## 一致事象・不一致事象の変化

一致事象・不一致事象の内容について、著者と大学院生1名（英語学専攻）により分類を行った。まず個々にカテゴリーの設定と回答の分類を行い、その後両名で協議することによりすべてのカテゴリーの設定について合意の上で39カテゴリーが設定された。カテゴリーの設定に際しては、できるだけ素朴な態度で一般的な概念を表すカテゴリーになるように努めた。これをさらに19のカテゴリーに集約し、頻度が少なかったカテゴリーを「その他」にまとめたところ、Table 9に示す結果となった。例えば"music"や"hobbies"という回答は「興味・関心」というカテゴリーに分類された。またFigure 10, 11は、T1, T2の回答をあわせて合計10以上の回答が得られたカテゴリーと、「対人関係」に対するカテゴリーとしての「家族関係」、および「無回答」を含め、それ以外のカテゴリーを「その他」として集約した比率を示している。各調査時期の一致・不一致事象それぞれについてカテゴリー間の比較を行うため、各回答者が重複して同一カテゴリーへの回答があった場合もカテゴリーへのカウントを1とすることにより、すべての基礎データを1, 0のデータとしてコクランのQ検定を行った。その結果、T1における一致・不一致事象およびT2における一致・不一致事象のすべてにおいてカテゴリー間に有意な比率の差が見られた（T1一致： $Q(8)=125.15, p<.01$ ；T1不一致： $Q(8)=73.53, p<.01$ ；T2一致： $Q(8)=38.17, p<.01$ ；T2不一致： $Q(8)=16.23, p<.05$ ）。T1では一致および不一致事象あわせて趣味嗜好、人生観、対人関係のカテゴリーが全体に占める割合が高かった。また、特に趣味嗜好は一致の比率が目立つのに対して、人生観については不一致の割合が高いことが示された。この傾向はT2でも見られるが、「人生観」において不一致の割合が相対的に増加していること、および全体的に不一致な事象の認知が全カテゴリーに行き渡っていることが明らかになった。さらにTable 9に示されるように、T1, T2のどちらも一致事象の合計は不一致事象の合計より多いが、

Table 9 一致・不一致事象

	1回目		2回目		計
	一致	不一致	一致	不一致	
対人関係	17	4	10	4	35
家族関係	0	0	0	3	3
興味・関心	13	6	10	5	34
政治	6	2	7	4	19
嗜好品	6	2	4	2	14
社会問題	7	3	6	2	18
宗教	2	4	2	3	11
モラル	3	3	5	4	15
哲学	3	2	0	3	8
仕事	3	2	4	0	9
学業	0	4	0	4	8
食べ物	4	0	0	2	6
人生	0	3	3	3	9
金銭感覚	0	2	0	0	2
健康	3	0	0	0	3
性的問題	4	0	0	0	4
パーソナリティ	0	0	5	0	5
その他	12	11	10	10	43
無回答	0	2	0	3	5
合 計	83	50	66	52	251

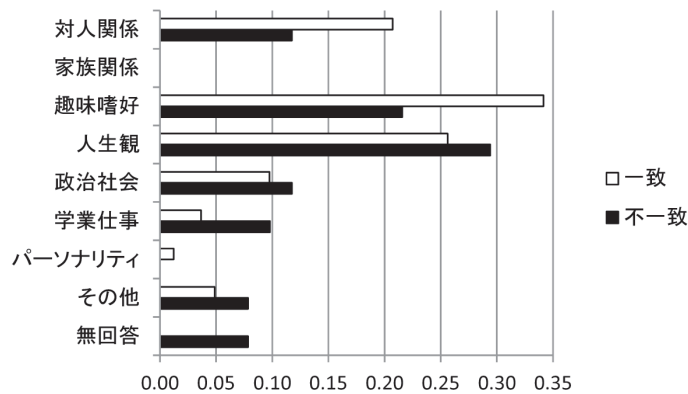


Figure 8 T1における一致・不一致事象（集約カテゴリー）の比率

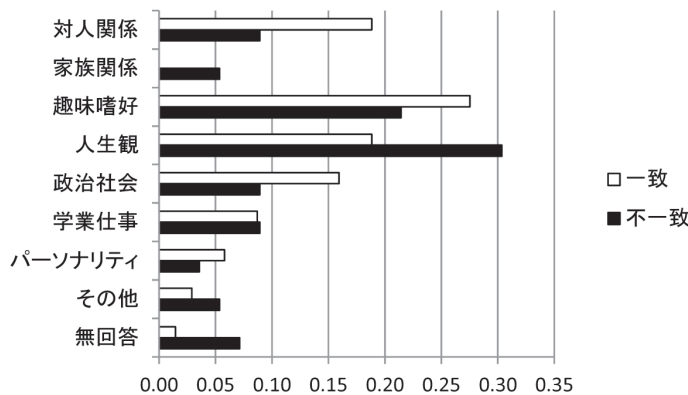


Figure 9 T2における一致・不一致事象（集約カテゴリー）の比率

T2では相対的に不一致事象の割合が増加していることが示された。

以上から、友人関係の比較的初期には身近な対人関係や趣味嗜好、人生観といった側面についての一致・不一致事象が認知される比率が高く、これらは初期の関係性の中で重視される事柄であることが示された。またその中で、対人関係と趣味嗜好については一致している割合が高いのに対して、人生観は一致、不一致ともに割合が高く、生き方の指針として重要な事柄について、一致していない部分も感じていることが示された。また関係が継続される中で、不一致のカテゴリーが全般的に増加していること、また人生観において不一致であることの比率が相対的に増加していることが示された。

## 考 察

### パーソナリティの類似・異質性認知とその変化

パーソナリティの類似性を測定するために行った両極尺度 28 項目について、自己への評価に

基づく因子分析と友人への評価に基づく因子分析を独立に行ったところ、類似した因子構造が得られた。自己評価では「有能性」「寛容性」「社交性」の3因子、友人評価では「活動性」「寛容性」「生産性」の3因子である。しかし各々、自己を評価する内的な視点と他者を評価する外的な視点の違いが反映されていることが推測できる。

これらの因子ごとに自己と友人とのパーソナリティ距離を求め、T1とT2での距離の比較を行ったところ、自己評価に基づく3因子および他者評価に基づく3因子の計6因子において有意差は見られず、また28項目全体からパーソナリティ距離を測定した場合についても有意差は見られなかった。したがって、T1とT2の間の半年間に関係性が進行していると仮定するとき、関係性の進展に対してパーソナリティの類似性評価は変化していないと考えられる。

また友人ペアとランダムペアのパーソナリティ距離を比較したところ、28項目全体から求めた距離についてはT1の時点で有意差が見られ、友人のほうが有意にパーソナリティ距離が大きく認知されていることが示された。これに対してT2では有意差は消失していた。関係性の初期において友人ペアのほうがランダムペアよりも距離が大きくなった1つの理由としては、まだ互いによく知りあっているとは言えない関係性の初期においてフォールス・コンセンサス効果(Ross, Green, & House, 1977)<sup>3)</sup>が作用し、友人とのパーソナリティの類似性を過大評価する傾向があるとすれば、友人との非類似性に注意が向き、互いの違いに気づいたときには過大評価分だけ差異が大きく認知されやすいことが考えられるであろう。なおこれらの結果はDuck & Craig (1978)の結果とは一致していないが、Duckらの測定は対象者間データによるものであり、本研究のような個人内の認知的現象を扱ったものではない。本研究の結果は、個人内の認知過程を示唆している。

また選択した友人とのパーソナリティ距離についてより詳しく調べるため、別の類似性指標として、互いのパーソナリティを共通次元から対比的にとらえているかどうかという観点からスコア化し、2回の調査間の変化を調べたところ、有意差は見られなかった。したがって、関係性の進展に対して、対比的な自己認知の変化は生じていないと考えられる。

さらに友人ペアとランダムペアのパーソナリティ距離について、どのような側面に差が生じているのかを明らかにするため因子ごとに比較した結果を見ると、T1では他者評価に基づく「生産性」因子に、またT2では自己評価に基づく「有能性」因子および他者評価に基づく「生産性」因子に有意差が見られた。これらすべてにおいて、選択された友人のほうがランダムな他者よりも有意にパーソナリティ距離が大きいと認知されていることが明らかになった。Figure 6, Figure 7に示されるように、これらの因子については、友人への評価より自己への評価が高く、友人と比較して自己のほうが能力に関する特性を高く評価している傾向が見られた。さらにT1

3) フォールス・コンセンサス効果は自己の行動的選択や判断の合意性を過大評価する現象であり、自分自身の立場が逸脱したものでないことを仮定するバイアスとして知られている(Ross, Green, & House, 1977)。またこの効果はパーソナリティにおいても生じることが調査により明らかにされている。



ではすべての側面で自己に対する評価が友人より高いことも示された。一方 T2 では寛容性についてのみ友人への評価のほうがより高くなるという変化が見られた。寛容性の自己評価は 2 回目の調査時に下がっており（自己評価因子 T1:  $M=3.87$ , T2:  $M=3.78$ ; 他者評価因子 T1:  $M=3.69$ , T2:  $M=3.57$ ), 逆に友人への評価は上がっている（自己評価因子 T1:  $M=3.42$ , T2:  $M=4.34$ ; 他者評価因子 T1:  $M=3.54$ , T2:  $M=4.33$ ）。以上から、関係初期においては能力をはじめとする全般的な特性において友人より自己を高く評価する傾向があるといえよう。そしてその後の関係性の継続に伴い、能力に関する評価は依然として自己評価のほうがより高いのに対して、人付き合いに関わる寛容性については友人への評価が上昇し、自己評価は下降する傾向があると考えられる。これらの結果は対象となった大学あるいは大学寮内に特有の傾向なのか、また日本の大学生も同様の傾向を示すのか、さらに検討することが求められる。

また二者間の一致・不一致事象についての分析からは、パーソナリティのカテゴリーに分類される度数の比率は他のカテゴリーと比較して低いことが明らかになった。Kandel (1978) の結果と同様に、パーソナリティに関して一致すること、あるいは不一致であることについての重要性は低いことが確認されたといえよう。

#### 友人関係の進展過程における一致・不一致事象の内容と変化

一致事象、不一致事象の度数を比較すると全体に一致事象が多い (Table 9)。しかし T2 では相対的に不一致事象の割合が増加していることが示された。また T2 では不一致な事象の認知がカテゴリー全般に広がっていることから、社会的浸透理論 (Altman & Taylor, 1973) が予測するように、友人関係の進展とともに自己開示の領域の広さと内容の深さが増加するのに伴い、不一致な事柄に気付く機会が増加していることが推測される。例えば T1 では家族関係について的一致・不一致事象は挙げられなかったのに対して、T2 では不一致事象が挙げられており、関係初期ではプライベートな身内のことを話題にすることが少ないのに対して、関係性の進展とともにプライベートな事柄が話題に上り、一致していないことを認識するように変化していると解釈できよう。

また T1, T2 に共通する結果として、一致および不一致事象のどちらにおいても趣味嗜好、人生観、対人関係についての言及が多いことが示された。これらの内容について、選択した友人と自己とを比較しており、友人のものの見方や考え方、好みなどを広く参照していることが推測される。また比較的關係の初期の段階から不一致であると認知される事柄があり、少なくない数にのぼることが明らかになった。バランス理論 (Heider, 1958) あるいは ABX モデル (Newcomb, 1961) に基づいて考えるなら、親しい二者関係において、バランス状態とインバランス状態とが併存して常態的に経験されているということになろう。また T1, T2 を通して、インバランスの内容については人生観や対人関係など、学生にとって重要性が高いであろう事柄も含まれている。門田・平本 (2004) は「基本的志向性」の類似性が関係性の維持に重要であることを示しており、また木下 (1965) は重要な課題について二者間で意見が異なる場合には相手への好意度が

減少することを実験的に示している。さらに類似－非類似非対称仮説等の対人魅力に関する諸仮説についても、態度の不一致性は対人魅力を低下させることを予測してきた。したがって本研究の結果はこれらの諸研究では説明しがたい結果を示している。ただし、本研究では不一致であることに関する感情価などの測定を行っていない。また個人にとっての重要性和大学寮という環境下における二者関係の継続性にとっての重要性とは独立に機能していることも考えられる。今後、不一致事象の認知や感情と、対人魅力あるいは関係の継続性についての動機づけとの関係についてより詳細に調べることが求められる。また本研究は英国内で実施したものである。日本国内での研究結果との違いは社会・文化的差異を反映している可能性がある。これらについても詳細な検討が必要である。

#### 引用文献

- Altman, I., & Taylor, D.M. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Reinhart & Winston.
- Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Deutsch, F.M., & Mackesy, M.E. (1985). Friendship and the development of self-schemas: The effects of talking about others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 4, 399-408.
- Deutsch, F.M., Sullivan, L., & Basile, N. (1991) The relations among talking, liking, and similarity between friends. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 4, 406-411.
- Dindia, K. (1997). Self-disclosure, self-identity, and relationship development: A transactional/dialectical perspective. In S. Duck (ed.) *Handbook of personal relationships*. Sussex: John Wiley & Sons.
- Duck S.W., & Craig, G. (1978). Personality similarity and the development of friendship: A longitudinal study. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 17, 237-242.
- Eidelson, R.J. (1980). Interpersonal satisfaction and level of involvement: A curvilinear relationship. *Journal of Personality and Social Psychology* 39, 460-470.
- Hays, R.H. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 909-924.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley & Sons.
- 石黒格 (2011). 人間関係の選択性と態度の同類性：ダイアド・データを用いた検討 社会心理学研究, 27, 13-23.
- 門田幸太郎・平本毅 (2004). 対人認知における類似性と非類似性について 立命館産業社会論集, 40, 3, 21-36.
- Kandel, D.B. (1978). Similarity in real-life adolescent friendship pairs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 306-312.
- 木下富雄 (1965). 重要性を異にする複数の課題状況下における集団 (A-B-X システム) のバランス傾向. 日本心理学会第 29 回大会発表論文集 p.342.
- LaPrelle, J., Insko, C.A., Cooksey, L., & Graetz, K. (1991). Self similarity, ideal similarity, and undesired self similarity as indicators of attraction. *Representative Research in Social Psychology*, 19, 65-74.
- Newcomb, T.M. (1961). *The acquaintance process*. New York: Holt, Reinhart & Winston.

- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- Rosenbaum, M.E. (1986). The repulsion hypothesis: On the nondevelopment of relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1156-1166.
- Ross, L., Green, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 279-301.
- 下斗米淳 (1990). 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, 37, 269-287.
- 下斗米淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究: 役割期待と遂行とのズレからの検討 実験社会心理学研究, 40, 1-15.
- 下斗米淳 (2002). 友人関係における役割行動期待の推移に関する縦断研究: 役割分担の再構築時期とその性差 専修人文論集, 70, 395-419.
- Singh, R., & Ho, S.Y. (2000). Attitudes and attraction: A new test of the attraction, repulsion and similarity-dissimilarity asymmetry hypotheses. *British Journal of Social Psychology*, 39, 197-211.
- 杉村和美 (1988). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.